

## マガキの貝殻

- 所在地 輪之内町福束 白髭神社  
輪之内中学校
- 時代 縄文時代

昭和47年に揖斐川の福束橋、昭和63年に長良川の大藪大橋ができた。この福束、大藪大橋の脚柱建設工事のとき、川底を掘り下げていく作業で大きな貝殻や二枚貝の殻が掘り出された。大きな貝殻は、長さ20センチ、横幅10センチ、厚さ4センチもある貝がらである。貝の断面は、幾十にも重なった殻でおおわれていて、現在の貝の形とよくにている。大きな貝はマガキである。

どうして、海水に生息する貝が福束橋や大藪橋の地下深くから発掘されたのであろうか。「輪之内中学校のボーリング柱状図」をみると地層の様子がわかる。これによると地下36メートルまで小石と砂でできた沖積層で、その下が硬い洪積層になっている。このマガキや二枚貝の出たところは、地下13メートルから29メートルの砂やシルト層である。

縄文前期や中期の時代は、輪之内町のあたりは、浅い海であったため、このような貝が生息していたと思われる。このころに生息した貝は、近辺からも出土している。縄文、弥生と時代が進むにつれ、肥沃な土の堆積が始まり、海岸線が南へと移り変わっていった。



マガキの貝殻